



▲ 活発化する中国との国際交流

社会科学院考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所の国際交流事業はここ数年、多方面に展開し、ことに中国とは、国家だけでなく、各省の研究所とも共同研究をおこなっています。その先駆けになった社会科学院考古研究所との交流事業は、1995年に結んだ「友好共同研究議定書」が今年6月に5年間の期限を迎えたので、8月21日に町田章所長が北京の考古研究所に赴き、新議定書に署名、新たな共同発掘について協議しました。

今年から始まる共同発掘の場所は、唐代長安城の太液池です。太液池は長安城の東北、龍首原上に営まれた大明宮にあります。規模は東西530m、南北330mあまり。蓬萊山など中嶋があり、池の周囲には多数の宮殿楼閣があったといえます。

太液は人の精気を司る気液のこと、これが満ちた池の意味でしょう。太液池はもとは漢長安城の建章宮の北にありました。唐代の池はその名前を襲名したものです。漢の太液池には蓬萊山、方丈山、瀛州の三山があり、亀魚を象るものがあったといい、実際に、太液池推定地では史料の魚にあたる石製魚も見つかっています。



協定署名後の記念撮影 考古研究所

ところで、唐の長安城には太液池の他に西内苑、禁苑など苑と池（宮）があり、対する平城宮にも松林苑、南苑と西池宮があって、両者の関わりを示唆するようです。苑池は都城にとって重要な施設であり、太液池の調査は、日中都城制の解明に大きな手懸かりになると思います。

遼寧省文物考古研究所との共同研究

1996年に、奈文研は、遼寧省文物考古研究所と「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究—」のテーマで、共同研究の協定を結びました。以来、北票市に所在するラマトン遺跡から出土した鉄製品・金銅製品などを中心に共同研究を進め、観察・実測・写真撮影と保存処理をおこなっています。

ラマトン遺跡は、大凌河北岸の丘陵地にある3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地です。1993年からの5次にわたる発掘調査で、計420基の三燕時代の墓が見つかりました。鉄・金銅・青銅製品など多彩で豊富な副葬品が出土していますが、中でも馬具は、4～5世紀の日本や韓国の古墳から出土する馬具の源流と考えられるものです。

現在、協定の最終年度にあたって、共同研究の成果を取り入れた図録等の作成に入っていますが、来



遼寧省文物考古研究所における実測風景